第２章　ジェナング修辞学理論の意義

インベンション理論の代表的なものの一つに、ジェナングの修辞学理論がある。彼の理論は、19 世紀末から 20 世紀初めにかけてアメリカで広く読まれたが、日本では、冨山房編纂『文章組織法』（1892）によって紹介され、武島又次郎『修辞学』（1898）や佐々政一『修辞法講話』（1917）に大きな影響を与えた。また、垣内松三『国語の力』（1922）においてもたびたび引用され、インベンションは「思想そのものを生み出す根源的な力」であると高く評価されるに至った。その後しばらく、修辞学はほとんど忘れ去られた状態となるが、1960 年代のニューレトリック運動で、アメリカでも日本でも再び注目されるようになる。

このジェナングの理論はどのようなものであったか。彼の最も代表的な著書である“The working principles of rhetoric”（1900）を中心にその内容を検討したい。

第１節　ジェナングの略歴と業績

１　ジェナングの略歴

ジョン・Ｆ・ジェナング（John Franklin Genung : 1850 年ニューヨーク生まれ。1919 年死去）、1881 年学術博士（ライプチヒ大学）、1905 年神学博士（エール大学）、同年人文学博士（ユニオン大学）。1875 年からニューヨークの礼拝堂等で牧師として勤め、1882 年、マサチューセッツ大学アーマスト校の英語学専任講師となる。1884 年、修辞学、雄弁術、英文学担当の準教授に昇格。さらに 1889 年、修辞学及び聖書学の教授となっている。修辞学以外に聖書学においても数多くの著書や論文を著している。[*1]

修辞学に関する彼の主要な著書としては、次の単著 4 冊と共著 1 冊が挙げられる。これらの著書は、1885 年～1915 年の約 20 年間、北アメリカの大学及び短大で、修辞学テキストとして広く使われた。

①“THE PRACTICAL ELEMENTS OF RHETORIC / with illustrative examples”（1886）

②“HANDBOOK OF RHETORICAL ANALYSIS : studies in style and invention, designed to accompany the author's practical elements of rhetoric”（1888）

③“OUTLINES OF RHETORIC : embodied in rules, illustrative examples, and a progressive course of prose composition”（1893）

④“THE WORKING PRINCIPLES OF RHETORIC : examined in their literary relations and illustrated with examples”（1900）

⑤（C. L. Hanson との共著）“OUTLINES OF COMPOSITION AND RHETORIC”（1915）

２　ジェナングに対する評価

ジェナングに対する評価は、“Encyclopedia Of Rhetoric And Composition”（1996）のジェナングの項目（Nan Johnson 執筆）に窺うことができる。以下、要約的に示す。（田中宏

---

*1 "Who's Who In America" vol. X（1918-1919）及び vol. XI（1920-1921）,（Chicago:A. N. Marquis & Company）

幸訳。傍線訳者。原文は、本論文巻末注記 1 に示した。）

(1) ジェナングは、修辞学を「談話（discourse）を、その主題（subject）と場面（occasion）との調和において、読者または聞き手の要件に適応させる技術（art）である」と定義した。この定義に見られるように、ジェナングの理論は、新レトリック学者ジョージ・キャンベルおよびヒュー・ブレアの理論だけでなく、伝統的古典修辞学に基づいたものである。

(2) ジェナングの教科書は、一般的文学形式（prevailing literary forms）を書く訓練コースで構成されている。政治的エッセイ、科学的論文、記述的論文、短編小説、論説、およびレポーターのコラムを含む、ディスコースのすべての形式を可能な限り取り入れるべきであると考えたのである。ジェナングの教育学的興味は、学生にすべての修辞学的場面をうまく扱えるようにするとともに、彼らが自らの生来の声（their innate voices）を開発できるようにする修辞学トレーニングを提供することにあった。

(3) ジェナングは、「インベンション」と「スタイル」の規範を強調した。ジェナングは、筋の通った作文を形づくる全体的プロセスの一部として、「配列」（arrangement）をインベンションのもとに組み込んだ。インベンションとは、「考え（thought）を、その性質（nature）と対象（object）にしたがって、相互に関係づけられ首尾一貫したディスコースの形式の中に組織するものである」と定義して、オリジナルな概念を望み通りの効果の得られる完成した形式に発展させるプロセスとして扱ったのである。

(4) ジェナングは、インベンション概念の下で、支持（supporting）と拡充（amplification）の方法によって中心思想（main ideas）を発展させることの必要性を論じている。

(5) ジェナングは、記述文（description）、物語文（narration）、説明文（exposition）、議論文（argumentation）を、異なる意図と効果を具体化するインベンションのプロセスであると定義した。

(6) ジェナングの文体に関する議論はまた、主題と意図を読者の知的かつ感情的な反応に調和させることを可能にする方法に焦点を合わせている。ジェナングは、スタイルを「言語における明確で意図的な効果を生み出すように言葉を選び、手配する方法」と定義し、明瞭さ（clearness）や力強さ（force）や優美さ（beauty）の質と、外延（denotation）、内包（connotation）、文構造（sentence structure）、及び散文体のリズム（prosaic rhythm）のような文体のテクニックに焦点を当てているのである。

(7) ジェナングの考え方においては、聴衆の予期される反応が、すべての文体の選択を左右する。ジェナングは、「修辞法に通じた人の最も大きな課題は、効果的に伝達することである」という伝統的な修辞学の原則を奨励したのである。

この辞典の解説及び評価からも明らかなように、ジェナングの理論において、インベンションは、「考え」（thought）を組織するための中心的役割を果たすものとして位置づけられている。また、オリジナルな概念を望み通りの効果の得られる完成形式に発展させるプロセスであると定義されている。コンポジションの基本である「配列」（arrangement）は、インベンションに組み込まれるものとして、また各種の「文体」（style）は、読者の反応に調和させていくために言葉を選び手配する方法として、それぞれ位置づけられたのである。

３　時代背景—1900 年前後と 1970 年前後の共通点

ジェナングの活躍した 19 世紀末は、アメリカにとって「国家発展期」に当たる。南北戦争（1861-65）から第一次世界大戦（1914）に至る 50 年間は、アメリカが「経済的にも農

業国家から資本主義的な工業国家へと飛躍発展した一大転換期」[*2]であった。黒人の教育の機会均等を求める運動や、大衆教育を積極的に進める声が高まり、就学義務を立法化する州や、義務教育年限延長に取り組む州が大幅に増えた。また、公立ハイスクールの校数が急速に増加伸長した。いわば、南北戦争前の「アカデミー時代」から、「ハイ・スクール時代」[*3]を迎えたのである。

また、教育思想としては、ドイツ教育学（ペスタロッチやヘルバルト等）の強い影響を受けながらも、デューイを中心とする経験主義や、プラグマティズムを基調とするアメリカ独自の教育哲学が創造された時期でもある。

このような時代の波は、大学にも及んでくる。学生数の著しい増加に対応するとともに、従来の豊かな教養を重視した教育内容を、「新しい真理を発見する力と情熱」にあふれたものに変えることが求められたのである。これに対して、イギリス修辞学（ブレア、キャメルなど）を簡略化し教育にも適応できるようにしたジェナングの修辞学理論は、書き手の主体を尊重し、誰もが書けるようになることを目指したものとして歓迎された。

ところが不幸なことに、この修辞学理論は単なる作文技術として受け止められて俗流化し、作文指導法としての有効性も疑われるようになってしまった。やがて「レトリック」は「コンポジション」に取って代わられ、大学の教育課程から脱落することになる。

こうして一旦衰退してしまった修辞学に再び光が当てられるのが、1960 年代後半である。アメリカでは「新レトリック」運動が盛んになり、修辞学が再評価されるようになる。そのとき注目されたのが、ジェナングであった。

この時期に、「新レトリック」が注目されるようになった原因は、二つあると言われている。一つは、「コミュニケーション手段のマス化及び多様化（ラジオ、テレビ、映画、輪転機による大量の新聞印刷など）という技術的な問題」、もう一つは、「白人中心の民主主義に対する様々の層からの反乱という政治的要因」[*4]である。コミュニケーション手段がマス化及び多様化したということは、情報を持っているのは特殊な一部の人間だけではなくなってきたということであり、常に受け手の状態を意識しなければならなくなったということである。これが、「創造力の重視」や「コミュニケーションの重視」という発想につながってくる。その役割を担うものとして、レトリックが浮かび上がったのである。

レトリックは本来、形式的修辞（Elocution）だけではなく、発想・構想（Invention）や配置（Disposition）をも含んで総合的に文章創出過程を探求するものである。その「インベンション」を近代化して、「事物についての法則や事物の新しい性質の発見」[*5]に応用すべきだと考えるようになったのである。

1900 年前後の頃も、1970 年前後の頃も、いずれも、教育の大衆化とメディアの変化という時代状況を背景に、誰もが文章を書けるようになる指導方法が求められた時代である。ジェナングの理論は、書き手を主体とした創造的文章表現指導法として高く評価されたのである。

---

*2 金子忠史『変革期のアメリカ教育―学校編―』東信堂、1985 年 4 月。

*3 世界教育史研究会編『世界教育史大系第 17 巻 アメリカ教育史Ⅰ』講談社、1975 年 2 月。

*4 波多野完治『現代レトリック』大日本図書、1973 年 5 月。

*5 柳沢浩哉「伝統修辞学と古典修辞学」『日本語と日本文学』7 号、筑波大学国語国文学会、1987 年 6 月。

第２節 “THE WORKING PRINCIPLES OF RHETORIC”（1900）の内容

１ “THE WORKING PRINCIPLES OF RETHORIC”の構成

本書は、1900 年に、米国ボストンの Ginn & Company 社から発行された B6 版、全 676 頁の厚い本である。副題には "examined in their literary relations and illustrated with examples"（文学的関係に関する考察と例示）とある。また表紙扉に、 "A restudied and reproportioned treatise based on the author's practical elements of rhetoric. "と付記されていることからわかるように､1886 年に刊行された“THE PRACTICAL ELEMENTS OF RHETORIC /with illustrative examples”を改訂したものである。

本書は、「序章」、「本論」（"STYLE"及び"INVENTION"の 2 編、5 部 17 章）、「索引」で構成されている。（本書の全目次を、本論文巻末注記 2 に示した。）

序章は、「修辞学の定義」（Definition of Rhetoric）、「適応としての修辞学」（Rhetoric as Adaptation）、「技術としての修辞学」（Rhetoric as Art）、「修辞学の領域と区分」（Province and Distribution of Rhetoric）の 4 節からなっている。その概要は、“Encyclopedia Of Rhetoric And Composition”に示されている通りである。（序章本文と拙訳を本論文巻末注記 3 に示した。）

第Ⅰ編（第 1～11 章）"STYLE"は､文体に関する問題である｡第Ⅰ部"STYLE IN GENERAL"（文体概説）、第Ⅱ部"DICTION"（用語）、第Ⅲ部"COMPOSITION"（文章構成）の三つの部で構成されている。分量的には、全体の 6 割弱（383 頁）を占める。

第Ⅱ編（第 12～17 章）"INVENTION"は、第Ⅳ部 "INVENTION IN ITS ELEMENTS"（インベンションとその要素）、第Ⅴ部 "THE LITERARY TYPES"（文章の種類）に大別されている。分量的には、第Ⅱ編が全体の 4 割強（279 頁）を占める。ここからも、いかにインベンションに重点を置いた書物であるかが見てとれる。

なかでも、インベンションについて直接論じた第Ⅳ部は、第 12 章 "Approaches to Invention"（インベンションへの手引）と第 13 章 "The Composition as a Whole"（全体としてのコンポジション）の 2 章で構成されている。コンポジションをインベンションに包摂する形で示しているところに特徴がある。

第Ⅴ部（第 14～17 章）では、「記述文 Description」「叙事文 Narration」「説明文 Exposition」「議論文 Argumentation」の 4 文種におけるインベンションの在り方が論じられている。

２ インベンションの定義及びスタイルとの関係

インベンションの定義は、第Ⅳ部の前文に次のように記されている。

○ "Thus with the first finished expression of thought there began in its essential principle the endeavor to find and systematize thought, that is, invention. "

（最初に仕上がった思考の表現とともに、その基本原則において、考えを発見し、組織化するための努力を開始する。それがインベンションである。）

○ "In its rhetorical or literary application, invention is the organization of thought, according to its nature and object, into a coherent and inter-related form of discourse. "

（修辞学的または文学的な適応において、インベンションは、その性質と目的に従って、相互に関係づけられ一貫したディスコースの形式の中に、考えを組織するものである。）

この二つの表現に共通するのは、「考えを発見し、組織化する」ということである。単に「発見」だけでなく、「組織化」を含んだ概念であることが重要である。

この組織化と関連して注目しておくべきは、スタイルとの関係を論じた箇所である。

○ "Questions of style, therefore, are not yet and never can be out of the account ; they come up continually, though in ancillary rank, because a work of invention can never make itself complete without the support of style. "

（スタイルの問題は、まだ終わったわけでは無く、考慮の対象外であるはずもない。インベンションの作業は、スタイルのサポートなしで自身を完全なものにすることはできないので、付随的ランクではあるが、スタイルの問題は継続的に現れることになる。）

特に、「インベンションの作業は、スタイルのサポートなしで自身を完全なものにすることはできない」という指摘が重要である。作文教育において、内容と形式は切り離せないものであることを、このように明言したのである。

３　インベンションへの手引き―第 12 章の内容

第 12 章は、二つの節で構成されている。各小見出しもあわせて列挙してみよう。

Ⅰ. The Sense of Literary Form.	Ⅰ. 文章表現形式のセンス
The Starting-point in Natural Bent.	出発点は天性で
The Superinduced Discipline.	訓練がもたらす
The Response to Occasion.	機会に対する反応
Lines of Inventive Talent.	発想の才能の傾向
Ⅱ. The Support from Self-Culture.	Ⅱ. 自己修養からのサポート
1. The Spirit of Observation.	1. 観察の精神
Alertness of Mind.	敏感な心
Diversity of Interest.	多様な興味
The Verifying Spirit.	物事の正確性を確かめる精神
2. Habits of Meditation.	2. 熟慮の習慣
The Habit of seeking Clearness.	明晰さを探求する習慣
The Habit of seeking Order.	順序を探求する習慣
The Habit of seeking Independent Conclusions.	独自の結論を探求する習慣
Avails of Sub-conscious Mental Action.	潜在意識の心的活動を生かす
Avails of Casual Topics in Meditation.	折々の話題を生かす
3. Ways of Reading.	3. 読書の方法
Creative Reading.	創造的な読書
ⅰ. Reading for Discipline.	ⅰ. 訓練のための読書
ⅱ. Compendious Reading.	ⅱ. 簡潔な読書
ⅲ. Reading by Topics.	ⅲ. 話題による読書
4. Disposal of Results.	4. 結果の処置
Taking Notes.	ノートを取る
References and Citations.	参考書と引用

(1) 第１節 "The Sense of Literary Form"

「文章表現形式のセンス」として挙げられている４項目から、インベンションに関する説明を要約的に示す。

①インベンション能力の二つの側面

インベンション能力は、誰もが生まれつき持っているものであるが、その能力は二つの側面を持っている。一つは、「事実とアイデアを把握する能力」である。複数のものを組み合わせて新しいものを構築していく"constructive faculty"（建設的・構成的な能力）である。もう一つは、「受け手を理解する能力」である。

②訓練の必要性

せっかくの創意に富んだ才能であっても、それを形にしていく訓練をしなければ、単なる直観にとどまる。インベンションの訓練を行うことは、意志を安定させ、判断力を高めることにつながる。さらに、これまでぼんやりとしか分かっていなかったことを明確にし、新しい世界を開いていくこともなる。

③機会への反応

読み手がどういう影響を受けるかは人によって異なるが、訓練によって、すべての人に明らかなインスピレーションを与えることができるようになる。インスピレーション・ポイントをどこにするかは、画家の題材選びに似ている。どの言葉を選び、どういう形式で述べていくかが問題である。

④インベンションの二つの筋道

インベンションには二種類ある。一つは、独創的インベンション（ORIGINATIVE invention）、もう一つは、組織化インベンション（ORGANIZING invention）である。前者は創作につながるものである。後者は、複雑なものをシンプルに秩序立てていくものであるが、この方が実用的であるといえる。

(2) 第２節 "The Support from Self-Culture"

ジェナングは、インベンションを高めるためには「自己修養（Self-Culture）」が重要であルと指摘し、その方法として「観察」「熟慮」「読書」の三点を挙げている。さらに、その結果をノートし参照することを推奨している。

①観察の精神

観察の精神とは、外的世界に対しても内的世界に対しても、事実を認識し、真実を求めていこうとする心である。この精神には三つの側面がある。一つ、「頭脳の明晰さ」である。行動的精神を持ち、好奇心に溢れ、識別力のあるものにしておくのである。二つ、「興味の多様性」である。多彩で柔軟な見方を持ち、公平な判断ができるようにするのである。三つ、「確認する精神」である。これは、物事の正確性・立証性を確かめることである。

②熟慮する習慣

一言で言えば、考えを成長させる力である。考えをまとめるだけでなく、主題が形式と順序を身につけるまで慎重に持続させていくものである。この習慣には五つの側面がある。一つ、「明晰さを探求する習慣」である。主題がまだぼんやりとした状態であるときに必要な思考である。二つ、「順序を探求する習慣」である。主と従、原因と結果、全体と部

分などを見分け、物事を順序立ててとらえることである。三つ、「独自の結論を探求する習慣」である。書くことにおいて独創力の基礎となるものである。四つ、「潜在意識の心的活動を生かす」ことである。急いで書かれた文章は、未熟で不穏当なものである。ある時点で中断し、潜在意識に任せることによって、深い落ち着きある文章となる。五つ、「折々の話題を生かす」ことである。いくつかのトピックを保持する習慣である。「考えのたまり場」を持っておき、観察や読書によって得られたものを保持しておくのである。

③読書の方法

「研究的に読む」方法である。エマーソンは「創造的読書」と名付けている。この創造的読書には三つの方法がある。一つ、「訓練のための読書」である。情報のため、もしくは娯楽のための読書ではなく、作者の思想の底流と理想に出会うために熟読するのである。二つは、「簡潔な読書」である。幅広いバックグラウンドを身につけるために、速く多くの本を読むのである。三つは、「トピックによる読書」である。これは、自分自身のテーマにそった読書である。索引や目次や序文から、主要なポイントを探し出して読むのである。

④結果の処置

熟慮と読書が進められるにつれて、結果を保存する方法が必要となる。ノート、インデックス、切り抜き、備忘録などを作っていくのである。ただし、万人向きの方法というものはない。自分に最もよい方法をそれぞれが編み出さなければならない。

４　インベンションの下でのコンポジション—第 13 章の内容

同書の第 13 章では、すべての形式に共通する「典型的枠組み」や「創意に富んだシステム」について論じている。以下に述べる原則は、すでに第Ⅲ部"Composition"第 9 章"The Paragraph"第 2 節"The Paragraph in Structure"において言及されたことであるが、文章全体を取り扱う場合の問題と手続について考察するために、改めて取り上げるのである。

コンポジションを単独の問題として取り上げるのではなく、インベンション概念の下において論じる理由について、ジェナングは次のように述べる。

> 「インベンションは、二つの正反対の方向に働く。第一は、集中（concentrative）である。素材を一つのテーマに向かって絞っていくのである。第二は、分配（distributive）である。中心テーマから、思考の様々な道筋を放射線状に外へ外へと考えていき、アウトラインやプランを作り出す。拡充（amplification）と呼ばれる最後のプロセスまで、この工夫を続行することによって、思想は落ちついたものとなり、想像力や感情が高まり、文体の感覚も明確になっていく。こうして、インベンションとスタイルは、別個のものではなく、一つの生命を持つものとして結実するのである。」

第 13 章は、三つの節で構成されている。以下の通りである。

Chapter ⅩⅢ.— The Composition as a Whole.	第13章　文章全体としてのコンポジション
Ⅰ. The Theme.	Ⅰ. テーマ
1. As related to the Subject	1. 主題との関連
2. As related to Form of Discourse	2. ディスコースの形態との関連
3. As distinguished from the Title	3. タイトルとの区別

Ⅱ. The Main Ideas.	Ⅱ. 中心思想
1. The Making of the Plan	1. プランの作成
2. Principles of Relation and Arrangement	2. 関係と配列の原則
3. Appendages of the Plan	3. プランの付属物
Ⅲ. The Amplifying Ideas.	Ⅲ. アイデアの拡充
1. The Province of Unamplified Expression	1. 拡充されない表現の領域
2. Objects for which Amplification is employed	2. 拡充を用いる目的
3. Means of Amplification	3. 拡充の方法
4. Accessories of Amplification	4. 拡充のアクセサリー

この目次に見られるように、本章は、 "The Theme. " "The Main Ideas. " "The Amplifying Ideas. "の三つの段階（stage）に分けられている。以下、各ステージごとに概要を整理する。

(1) 第１節 ″The Theme″

テーマは、「すべての著作の構造の基礎となるもの」であり、「ディスコースに働くアイデア」である。恣意的に急いで作り上げたものではなく、強健な精神的プロセスを経て、漠然とした拡散状態にあったものを、完全な形に変えていったものでなければならない。

テーマの決定にあたって注意すべきことは何か。ジェナングは、三つの条件を挙げる。

第一は、「話題」（subject）との関連性である。話題とテーマとの関係は、クラスと個人との関係に例えられる。テーマは決してクラスの一部ではない。個人として、クラスのすべての特色を保持しているものである。一定の明確な方向に向けられた話題全体である。書き手は、適時性や、読者への適応性や、取扱いの制限や、表現形式などを考慮しながら、テーマを絞っていく。すべての話題が重要であるわけではなく、また、すべてを言うことはできないということを自覚しながら、厳しく選び抜いていくのである。書き手は、話題からテーマを導き出すとき、二つの方向に知能を働かせなければならない。一つは、内容全体を大きくつかんでいく感覚。もう一つは、それを明確な言葉で記述していく集中力である。テーマの記述が細かく正確になればなるほど、読者は統一性あるものとして受け取ることができる。このテーマの明確化を疎かにしてはならない。

第二は、「ディスコースの形式」（form of Discourse）との関連性である。説明文や議論文などの論理的な文章形式では、テーマは目立つものとなるし、記述文や物語文などの想像力や感性が重視される文章形式では、隠れて目立たないものとなる。弁論は、知性と感情の両方に関係しているので、テーマは時には明確に示されるし、時には拡散した形で示される。いずれにしても、どの形式においてもテーマを省くことはできない。文章全体の中で慎重に決定されなければならないものである。

第三は、「タイトルとの区別」（distinguished from the Title）である。テーマは内的なものであり、タイトルは外的なものである。テーマは、作家のインベンションを集中させるためのものであり、タイトルは、読者を引き付けるためのものである。テーマは統一と有機体を生み出す。タイトルは予想を作り上げる。タイトルをつける際には、最も真実で、好意的な印象を可能にすると思われる名前を選ばねばならない。タイトルの特徴については、三つの場合が考えられる。一つは、「真実性」（truthful）である。理解させるのに、正しい手がかりを与えるものでなければならない。二つめに、「魅力ある表現」（attractive）

である。楽しい予測が付けられるものでなければならない。三つめに、「品質」（quality）である。内容以上のことを示したり、筋書きを示しすぎたりするのは、浅はかである。

(2) 第２節 "The Main Ideas"

テーマを決定するプロセスによって、話題（subject-matter）はアイデア（working-idea）に変えられ、一定の方向に向けられている。だが、まだ分析や調整はされてもいない。「プランの作成」という次の段階に進み、「中心思想の発見と配置」を行わなければならない。ここで熟考していくものは、言わば「枠組み」（a framework）であり、「小さなアイデア」（minor ideas）である。しかも、この段階で作られる中心思想は、のちに「拡充」の観点から改訂する必要がある。にもかかわらず、プランを立てることは、論理的精神に一般的コントロールを与え、測り知れないほど貴重なガイドとして働いていく。これは、アイデアをプランの奴隷にすることではなく、制限された中で案内し保持することである。

ア　プランの作成（The Making of the Plan）

プランの作成上の留意点は、二つ挙げられている。

一つは、「スケルトンアウトライン」（The Skeleton Outline）である。これは、「主要な考えが表形式に描かれ、テーマとそれ以外のものとの関係が線や番号で区分されているリスト」である。アウトラインの作成段階ならば、主要部と従属部を組み替えることもできるし、思考の流れのギャップを埋めることもできる。不明瞭な部分や、回避すべき問題も見えてくる。具体的には、①重要度の大小を明確にしたシンプルなものであること、②ランク付けの表記法を明確にすること、③導入と結論はこの段階では考察の対象としないこと、④従属的なものには記号や番号をつけないこと、などに留意すべきである。

もう一つは、「構造の目印」（Landmarks of Structure）である。見出しや番号等の使用に工夫を凝らすことである。難解なものほど、その連結性（linkings）と連続性（sequences）に気を配る必要がある。また、音声言語の場合にはいっそう周到に作成する必要がある。さらに、見出しの表現にランクの混用がないようにすることにも注意すべきである。

イ　関係と配列の原則（Principles of Relation and Arrangement）

関係と配列の原則としては、「一般性を厳守する」、「自然な進行状態」、「思考の性質に応じた選択」、「思想構築の順序」の四つを挙げている。

一つめの「一般性を厳守する」とは、①各段階や区分ごとに明確な「特徴」を有していること、②各段階や区分が首尾一貫した「連続性」を持っていること、③各段階や区分が「クライマックス」に向けて動いていることである。

二つめの「自然な進行状態」とは、①最初に「定義する段階」を必要とすること。物語文であれば、場面や時代や主要人物の性格など状況設定が必要である。議論文であれば、論題の性質や範囲や一般的意義を定める必要がある。②「中心部」が必要であること。ここで、これまでの細部や詳細な説明や推論がつながり、全体像が明らかにされる。③最終的に、要約とか訴えなどの「解決段階」が必要であること。この三つがいつでもこういう形で現れるとは限らないが、こうした平易な流れを常に心に留めておくことが必要である。

三つめに「思考の性質に応じた選択」という観点から、「観念連想」の三つの法則を挙げている。①「接近の法則」、②「類似及び対比の法則」、③「原因と結果の法則」である。

四つめに、「思想構築の順序」として①「帰納的順序」、②「演繹的順序」を挙げている。前者は、「読者が言わば協力者として、同じコースをたどって、真理を見つけ出してくれる」ものである。この順序ならば、奇妙に思われる真実や証拠が先行しない限り、結論に反発を引き起こすことがない。後者は、「中心的な真実が先に示されているので、具体的な事実と説明を扱う間、読者はそれらに同意してくれる」方法である。人生や経営の重要な実用的真理の取り扱いを語るのに適している。弁論において最もよく用いられる順序である。

ウ　プランの付属物（Appendages of the Plan）

ここでは、「導入」（The Introduction）、「結論」（The Conclusion）、「転移」（Transitions）が取り上げられる。ディスコースの付属物であるが、無視するのはよくない。

「導入」は、テーマへの接近を図る上で、重要な役割を果たす。知的なものや教訓的なものにおいては、話題や観点や方法についての予備的な情報を供給することに重点が置かれる。弁論のように感情に訴えるものにおいては、興味を喚起し、先入観を取り除くことに重点が置かれる。そのスタイルという点では、読者の注目を引くだけの活力があることや、核心に近づきやすくなるように平易で率直であることが求められる。「導入」を書く時期については、本体部分がほぼできあがってからにすべきである。最初に書こうとすると、散漫で、話題からかけ離れたものとなりやすい。

「結論」は、ディスコースの内容が読者の心に印象的に残るようにする上で、重要な働きをする。どのような形を取るかは、作品の性質によって異なる。知性的なものであれば、議論の中心点の繰り返しか、テーマを具現した要約を行うことが多い。感情に訴えるものの場合は、行為への動機付けや義務感への訴えとなることが多い。

「転移」は、一つの考えから別の考えに移るときに、これまでの内容を保持したり、これからの内容を予測させたりするものである。議論の導入と本体との間、また、議論と結論との間などで、その変化を明示することは、連続性を保たせるために重要なことである。

(3) 第 3 節 "The Amplifying Ideas"

コンポジションの最終段階として、これまでに作られた骨格を、的確な説明や事例などによって命あふれるものにしなければならない。この仕事をするのが、「拡充」（amplification）である。これは、すべてのコンポジションにおいて最も必要なプロセスであり、インベンションの側からコンポジション自身に接近していく重要な会議の場である。

ここで検討されるのは、新しい語の識別と効果のポイントと順序の変更である。時には、ここで最初のプランを廃棄することもあるが、それは、考えの道筋がいっそう活発になり、自己判断力がいっそう自然なものになったことを意味している。

ア　拡充されない表現の領域（The Province of Unamplified Expression）

すべての場合に「拡充」が必要だというわけではない。表現を削り洗練すべき時もある。その典型は、いわゆる「金言」と呼ばれているものである。金言は、溢れ出るほどぎっしりと考えの詰め込まれた短い文である。説教の終わりに置かれる場合、広範囲に及ぶものであったり、一方的であったり、逆説的であったりしても、読者自身が補って、そこから深い意味を読み取るものである。説教の終わりに限定することはない。どのようなディスコースの過程においても、時々、考えをいくつかの金言的断定に進めていくことはよいこ

とである。印象的な言葉を間に挟むことによって、重要なポイントが見つけやすくなる。

イ　拡充を用いる目的（Objects for which Amplification is employed）

なぜ「拡充」を用いるのか。アウトラインだけでは「錠剤に濃縮された食べ物」を摂るようなものだからである。①適切な範囲や限界を与えて、アイデアに適応性を提供するため、②読者が、アイデアの関係を確認し、はっきりと理解する時間を確保するため、③アイデアに適切な色彩や雰囲気を与えるため、など、論理的な思考を、想像力に強くアピールするものに変えようとするときに特に必要となる。

ウ　拡充の方法（Means of Amplification）

「拡充」は、根本的には人の問題である。自然に行われる方法として三つ挙げられる。

一つは、「繰り返し」である。何かを定義するときなどに用いられる。一見、反復には見えない多様な表現を用いて、異なった様相の中で一つのアイデアを明らかにしようとする。ラテン語では「説明、解説」と言われてきたものである。その様相としては、単純なリピート、比喩的表現、具体化、提案とは逆の否定的考察、などが挙げられる。

二つめは、「特殊化」である。一般的な内容を構成要素に分けるのである。列挙したり、例証したりするのが代表的なものである。

三つめは、「記述的詳細の追加」である。記述的表現を用いてイメージ豊かな拡充を図ったり、逸話や寓話などを用いて、想像力によって理解を可能にするのである。

エ　拡充のアクセサリー（Accessories of Amplification）

上記の直接的方法以外に、考えに豊かさと興味を与える「拡充のアクセサリー」がある。それは、「引用」と「ほのめかしと暗示」である。「引用」は、正しく使用された場合は、陳述内容の裏付けとなり、適切なフレーズに焦点を与えるものとなる。また、「ほのめかしや暗示」も表現を拡充させることに効果的であるが、これらは漠然としていて、規則や訓練の範囲を超えている。

５ ジェナングの修辞学理論の特徴

以上、検討してきたジェナングの修辞学理論の特徴は、4 点にまとめられる。

第一の特徴は、コミュニケーションを重視したことである。場面や読者または聞き手の心理や理解度に適応（adaptation）した表現を、いかに実現させるかに重点を置いていた。正確さよりも説得力を重視し、何を選び、どういう処理をしていくかという、内容に応じた表現のあり方を追求しようとしたのである。これは、文章表現に限定したものではない。話し言葉による効果的伝達も考察の対象としたものであった。

第二の特徴は、インベンションを重視したことである。インベンションは、文章表現活動の出発点であるが、それにとどまらず、文章作成過程全体を統括するものであると位置づけていた。語句や文や段落の配置も、文体の選択も、すべてインベンションのもとで行なわれるべきものだと考えていたのである。ジェナングの理論は、A・S・ヒルの理論[*6]を受け継いだものであったが、ヒルが明記しなかった「インベンション」を、文章作成過程を統括していく概念として位置づけたのである。

---

*6 A・S・Hill "THE PRINCIPLES OF RHETORIC"（1878）では、「第Ⅰ部 COMPOSITION IN GENERAL」「第Ⅱ部 KINDS OF COMPOSITION」のいずれにも、インベンション概念が提示されていない。

第三の特徴は、インベンションの才能には二種類あると想定した点である。独創的インベンション（Originative Invention）は、創作につながるものである。組織化インベンション（Organizing Invention）は、複雑なものをシンプルに秩序立てていくものである。インベンションは、スタイル（文体）の助けなしでは具体化できないが、その文体を組織化するものとしてインベンションを想定していたのである。

第四の特徴は、インベンションを豊かにする方法も視野に入れ、その訓練を重視していたことである。ジェナングは、自己修養の必要性を説き、「観察の精神」を磨き、「熟慮の習慣」を身につけ、「読書」を励行するように勧めた。こうした日常の訓練がなくては、インベンションは豊かにならない、と主張したのである。

第３節　近代日本作文教育への影響

こうした、ジェナングの理論は、日本の作文教育にどのような影響を与えたか。

１　修辞学理論の翻訳移入―冨山房編纂『文章組織法』（1892）

ジェナングの理論をいちはやく日本に紹介したのは、「普通学全書第十九篇」として刊行された冨山房編纂『文章組織法』（冨山房、1892）である。これは、ジェナングの“The Practical Elements of Rhetoric”（『応用修辞学』と訳されている）に基づき、「ベーン、クハッケンボス、ハーベン、コックス諸氏の修辞学教科書及びスペンサー氏の文体論を参考にして編纂」されたものである。とりわけインベンション（「意匠」と訳されている）については、ジェナングの理論がほぼそのまま紹介されている。

例えば、「意匠の三級順序」として、次の三点を挙げている。

> 第一　思考若しくは観察に由り文章の材料を発見することは、意匠の最重要部分なり。然れども、此事たる作文者箇々の工夫に属するものにて、規則を以て指示し得べきに非ず。故に、作文者の力を見るは此一点にありと云ふも誣言に非るなり。
>
> 第二　材料の発見、素より必用なりと雖も、材料は常に発見せらるゝものに非ず。故に吾人は、百般の事物に就き幾多の吟味を遂げ、紛紜錯綜せる中に就て之を取捨選択して、適当なるものを採用せざるべからず。此事たる全く作文者の理性才幹と其場合の需用とに属するものなり。
>
> 第三　作文者は巧に材料の各部をして其処を得せしめ、能く各部と全体とを適応せしめ、全体の構造を一有機体の如くならしめ、以て完全なる一思想として読者の脳中に注入せしめざるべからず。蓋し文の妙なるは、其表現する思想井然として錯乱せず、能く脉絡貫通し、読者をして之を了解するに費やすの努力少く、之を玩味する愉快の度を多からしむるに在り。（同書 62-63 頁。句読点、傍線は引用者。）

さらに、「意匠開発の工夫」として、「第一、観察の習慣を養ふへし」、「第二、思考に関する種々の習慣〔明晰、秩序、自己独特の結論〕を養ふへし」、「第三、読書の習慣〔練習的読書、急速的読書、題名を探りて読むべきもの、入用の時の外常に博覧すること〕」を挙げている点も、ジェナングの理論そのままである。

２　構想概念を含み込んだインベンション―武島又次郎『修辞学』（1898）

武島又次郎は、『修辞学』（博文館、1898）において、インベンション（「構想」）の問題を取り上げている。（これは本論文第１章でも引用したが、再度挙げておく。）

吾人が、一事物を述べんとするに当り、之に就きたる思想を集め、之を潤飾し、布置する等の働きを修辞学上に構想（Invention）といふ。構想とは羅典語の Inventio といふより来る。新たに感想を作り出すの義なる也。かくて構想とは、第一に、記載の材料を得ること也。二は其適不適を識別し、削るべきは削り、用ゐるべきは用ゐるべきこと也。而して三に是材料を如何に配別すべきかを一定すること也。（同書 142 頁）

武島は、「緒言」において、ジェナング“The Practical Elements of Rhetoric”、ヒル“Foundations of Rhetoric”及び“Principles of Rhetoric”などを参考にしたと明記しており、明治期後半に、アメリカの修辞学が盛んに導入されたことを物語るものである。

３　文章を統一する機能—佐々政一『修辞法講話』（1917）

佐々政一も『修辞法講話』（明治書院、1917）をまとめるにあたって、「ヒル氏以外に、自分の修辞法の組織に就て多少学び得たところのあるのは、アムヘルスト大学のフランクリン・ゲヌング氏（ジェナングのこと。引用者注。）である。氏の修辞法に関する著書も三部[*7]を見たが、これは頗る論理的で、秩序が整然としてゐる。ヒル教授の説を日本に応用するには、ゲヌング氏の秩序をも参照するのが極めて便利であると信じたのである。」（同書 3 頁）と述べている。

佐々は、インベンションという語を用いてはいないが、前編「修辞通論」第七章「統一」において、次のように述べている。

さて、叙上の統一といふことを、ゲヌングなどは、文を流暢にする条件の一として数へてゐる。なるほど統一のない文は思想の連絡を失つてゐることが多いからして、文の推移が渋滞して、理解力を躓かしめる、だから不流暢であるともいへる。だが不統一は単に流暢を害するのみならず、又文意を曖昧にし繊弱にすることが多い。一句一句の意味は判然としてゐても、全体の構造が混雑してゐると、読み了つても何等のまとまった理解も記憶も得られない。従って又鮮明な有力な印象も残らない。つまり不統一は、明晰、遒勁、流暢のいづれの条件にも障碍をなすものである。かの三条件は主として思想発表の形式に関係してゐるが、統一は思想その物の性質にも深く関係しているのである。（同書 154 頁）

ジェナングの原著では、この「統一」を推進させていくのがインベンションの働きであると定義しており、ここに佐々政一とインベンションとの繋がりを見出すことができる。[*8]

４ 創造を誘導する合法的原則—垣内松三（1922）

インベンションを「創造を誘導する合法的原則」であると評価し、文章の表現形式と表現内容とを統一的把握に生かそうとしたのは、垣内松三『国語の力』（不老閣書房、1922）である。本書は、「解釈」におけるセンテンス・メソッドを主張したものであるが、ここ

---

*7 佐々が参照したジェナングの著書三冊がどれを指すのかは定かではないが、『學鐙』（丸善、1989 年 2 月創刊）の 1906 年 2 月号"Monthly Bulletin of International Bibliography"の記載から推察するに、「修辞学の実用的な要素」（1886）、「修辞学分析のハンドブック」（1888）、「修辞学概要」（1893）の 3 冊かと思われる。

*8 佐々政一とアメリカのカレント・トラディッショナル・レトリックとの関係については、柳沢浩哉「佐々修辞理論研究」（『人文科教育研究ＸⅡ』筑波大学教育系人文科教育学会、1985 年 12 月）に詳しい。

で論じられている内容は、作文にも通じるものとして理解すべきである。

例えば、垣内は、第Ⅴ章「国文学の体系」二二「国語の力」において、次のように述べている。（以下、引用は、『国語の力』不老閣書房、1928 年 26 版改版による。）

> 「国語」の学科は読方（解釈）と綴方（作文）の二系素から成立つのであるが、（中略）この二方面の鍛錬は相互に協力し合一して、その究極の目的に近づけしめるのであつて、表現の経験に苦しんだ人の読方は、読方の上にさうした経験の無い人よりも、深い視方が現はれて来なければならぬ。また、読方に就いて考へた人は、綴り方の上に自ら合法的な表現を求むることであらう。在来の修辞学・文法等は、主として客観批評の上から帰納せられた法則であつて、その叙説の順序に於ても自らそれを示すのであるが、もし修辞学・文法がInventionより始まり、文体論・文章法から措辞法・単語論に移り、更にこれを創意に照らして方法的に研究するものであるとしたら、さうした読方から帰納したる修辞学・文法は、直に綴方・作文に於て創造を誘導する合法的な原則と見られるであらう。（同書 314 頁）

つまり、「国語の力」の鍛錬は、解釈と作文の両面から行なわれるべきものであるが、「インベンション」を重視していくならば、「読み」は「創作」につらなり、「修辞学・文法」が作文における「創造を誘発する合法的原則」となる、と指摘したのである。

垣内が、「思想そのものを生み出す力」として「インベンション」を重視したことは、次の箇所（第Ⅲ章「言語の活力」二二「修辞学的解釈」）からも窺い知ることができる。

> 措辞・句法・構文の研究が如何に精密に考へられたものであつても、それを適用して文章を解釈するのは倒錯である。文に現はれたる構想・句法・措辞の形はInventionより導かるゝ内面的必然性を有するのである。モウルトンの「芸術的摂理」と「文学的建築」との関係、motive forceとmotive formとの関係等もその全一的統合の上に始めて解決せられ、文の真相はその内面に於ける具体的統一の原型に於て見得られるのであると考へらるゝ如く、句法の倒置・転換・頓止等は、その立場からのみ解釈し得るのである。（同書 189 頁）

このように垣内は、文章の解釈にあたっても、「文の形」を静的に捉えるのではなく、「インベンションの生成・展開の相」として動的に把握しようとしたのである。

垣内はまた、「文は瞬時に変化する意識の連続の焦点を文字に翻訳したものと考へられ、「文の形」はその連続を統一したる焦点の中核より顕現したものと見ることができる。」（第Ⅱ章「文の形」九「意識の焦点」、同書 119 頁）とも述べている。文章表現を、直観と表現との「統一的総合」と見るのである。その「意識の焦点」の根底にあるものが、"motive force"と呼ばれるものであり、「インベンション」と直結するものである。

さらに垣内は、講演「国語教授と国語教育」において、作文教授について言及し、「私は在来の作文教授法論よりは、作文の際に動く生徒の心の作用の観察から出発し、作文の成績に就いて主観的に批評するよりも、書いてゐる間の具体的な生々した作用を観察して、そこに作文教授法の根柢を求めなければならぬと考へて居る」（同書附録 343 頁）と語っている。作文の結果だけでなく、作文の過程に着目すべきだというのである。

課題作文か自由選題かという問題についても、「何事よりも、書くべきことを所有すべきこと、即ち物をよく見ること、又は心を熟視することを主とすべき」であり、「根本の問題は書かうと思ふことを（書かうと思ふことが無いところから作文の問題は起りません。

書かうと思ふことがあつてもまとまらず、また書けないところから作文の問題が始まります）自由に表現することの出来る自由さを喚起するところから始まる」（同書 351 頁）と指摘している。大事なことは、「書くべき内容」を持たせることであり、自由に発表する作用に束縛を与えない限り、「課題の方法は決して排斥すべきものではない」と主張する。

垣内が、このようにジェナングの理論を受け、「生徒の心の作用」と「インベンション」を重視して、「想」と「形」との統合した作文指導を展開していく必要性を強調したことは、その後の理論的研究に大きく寄与するものであった。